

律令国家形成期における棺台の様相

西光 慎治

1 はじめに

古墳時代終末期において、我が国における墓制が大きく変革期を迎える。前方後円墳が消滅し、薄葬化が進む中で墓制の改革が進められていく。当該期は乙巳の変や白村江の戦いなど我が国の根幹を揺るがす大きな転換期にもあたっており、地域社会から政治的社会へと成熟していった時期でもある。外交政策においても各国の制度や文化の影響を強く受けて、律令国家形成に向けて大きく飛躍していく。この頃、畿内を中心に横穴式石室や横口式石槨で特徴的な終末期古墳が築かれていく。こういった終末期古墳が築造された背景は激動する東アジア情勢が如実に反映された結果であると考えられる。特に終末期古墳の中で埋葬施設に棺台を有した古墳が7世紀代に出現する。確認されている事例はそれほど多くはないものの、埋葬施設に整然と配された棺台は、薄葬化の流れの中で単葬墓として築かれた終末期古墳を構成する要素として重要な位置を占める。

ここでは、律令国家形成期の終末期古墳に用いられた「棺台」に焦点をあて、我が国の棺台の出現からその変遷過程について整理を行い、韓半島における棺台使用古墳との比較検討を通して、我が国における棺台の起源と律令国家形成期における棺台の使用意義について考察したものである。

古墳時代終末期において、埋葬施設に棺台を有している古墳が畿内を中心に確認されている。棺台とは文字どおり「遺体を納めた棺を安置する台」である。古墳時代において木棺を安置する際、棺底に人頭大の川原石を並べ、使用されている事例を「棺台」と呼称している例も多く散見される。その一方で、終末期古墳において埴などを使用した棺台が畿内を中心に確認されるなど、古墳時代後期から終末期にかけて、さまざまなタイプの棺台が存在しており、総じて「棺台」と呼称されている。古墳時代後期においてはその他にも土師質亀甲形陶棺など、これまでの円筒棺から脱却した脚部を有する棺が登場するなど、新興勢力の台頭と墓制の変革がこういった新しい棺を誕生させた背景にあると考えられている。

本稿では古墳時代後期において、川原石などを木棺などの底に配置したタイプを「棺台」ではなく、棺を設置するための「受け石(台)」として捉え、7世紀代に「埴などを用いて台状を呈した、遺体を納めた棺を安置するための台」を「棺台」と定義することにより、7世紀における棺台の出現した背景や性格について検証を行っていきたい。

I 畿内における棺台使用古墳の概要

畿内において棺台使用古墳をみると、大和9例、河内6例、摂津2例の合計17例が確認されている。ここでは各事例について概観したい。

1、牽牛子塚古墳(奈良県高市郡明日香村)

対辺長22m、高さ約4.5m以上の八角墳である。埋葬施設は、二上山の凝灰角礫岩を使用

した割りぬき式横口式石槨である。埋葬施設の中央には仕切り壁を有しており、両側に長さ約 2m、高さ約 1.23 m の墓室が設けられている。東西の各床面には長さ 1.95m ~ 96m、幅約 80cm、高さ 10cm の棺台が削り出されている。閉塞石は二石からなり、内扉は凝灰岩製で高さ約 1.12m、厚さ約 0.62m、幅約 1.47m を測る。内扉の四ヶ所には方形の孔が穿たれており、扉飾金具が装着されていたものと考えられる。外扉は安山系の石材を用いており、幅約 2.69m、厚さ 0.63m、高さ約 2.44m である。東西両石槨の壁面には漆喰が塗布されている。内部からは夾紵棺片や金銅製棺座金具、ガラス玉や人骨等が出土している。築造年代は 7 世紀後半である（明日香村教委 2013 ほか）。

2、カヅマヤマ古墳（奈良県高市郡明日香村）

一辺約 23m、高さ約 5m 以上の二段築成の方墳である。埋葬施設は南に開口する磚積み式横穴式石室で、全長 6m 以上を測る。玄室は長さ約 3.2m、幅約 1.8m で残存高約 90cm である。玄室床面には結晶片岩の板石を敷き詰めており、その中央には長さ約 2.3m、幅約 1.17m、高さ約 25cm 以上の棺台が設けられている。棺台は結晶片岩の板石を積み上げており、全面に漆喰が塗布されている。羨道の玄門部付近には川原石を敷き詰め、中ほどから羨門部にかけて結晶片岩や流紋岩質溶結凝灰岩の板石が敷かれている。羨道の中央には幅約 40cm、深さ約 25cm の暗渠排水溝が設けられている。石室は石取りや東南海・南海地震の影響で崩壊している。出土遺物は須恵器・漆片、鉄釘などがある。築造年代は 7 世紀後半である（明日香村教委 2007）。

3、真弓テラノマエ古墳（奈良県高市郡明日香村）

墳丘については詳細が不明なものの、盛土については版築で構築されている。埋葬施設は結晶片岩を使用した南に開口する磚積み式横穴式石室である。石室の大半は破壊されており、玄室の奥壁基底面のみ残存している。玄室幅は約 1.7m を測る。玄室内の床面には平瓦が敷き詰められている。この平瓦は上下に分かれており、下部は凹面を、上部は凸面を上にして設置されている。上下の平瓦には漆喰が充填されている。玄室の中央部には主軸に平行した棺台が設置されている。棺台の規模は幅約 90cm、高さ約 12cm で長さについては不明である。棺台は平瓦の凸面を上にして積み上げられており、瓦同士は漆喰で固定されており、棺台の表面も漆喰が塗布されている。また棺台の北側小口は奥壁と接している。築造年代については 7 世紀前半頃と考えられる（明日香村教委 2011、西光編 2012）。

4、高松塚古墳（奈良県高市郡明日香村）

直径約 23m、高さ約 8.5m の二段築成の円墳である。埋葬施設は二上山の凝灰岩切石を用いた横口式石槨で、内法長約 2.65m、幅約 1.03m、高さ約 1.13m を測る。壁面には極彩色の四神図と星宿図、そして男女群像が描かれている。墓室内からは漆塗木棺、海獣葡萄鏡、刀装具、飾金具、人骨等が出土している。石槨西壁に下から約 17cm 付近に擦った跡が確認できることから、納棺時に棺台が擦れた跡と考えられている。棺台については木製が想定されている。築造年代については 7 世紀末～ 8 世紀初頃である（榎考研編 1972、岡林 2008）。

5、キトラ古墳（奈良県高市郡明日香村）

直径約 23m、高さ 3.3m の二段築成の円墳である。埋葬施設は凝灰岩の切石を用いた横口式石槨で内法長約 2.7m を測る。壁面には極彩色の四神図、天文図、獸頭人身像が描かれている。墓室内からは漆塗木棺をはじめ刀装具、飾金具、人骨などが出土している。石槨内から出土した漆片から漆塗木棺以外に漆製品が存在していたことが明らかとなり、木製に漆を塗布した棺

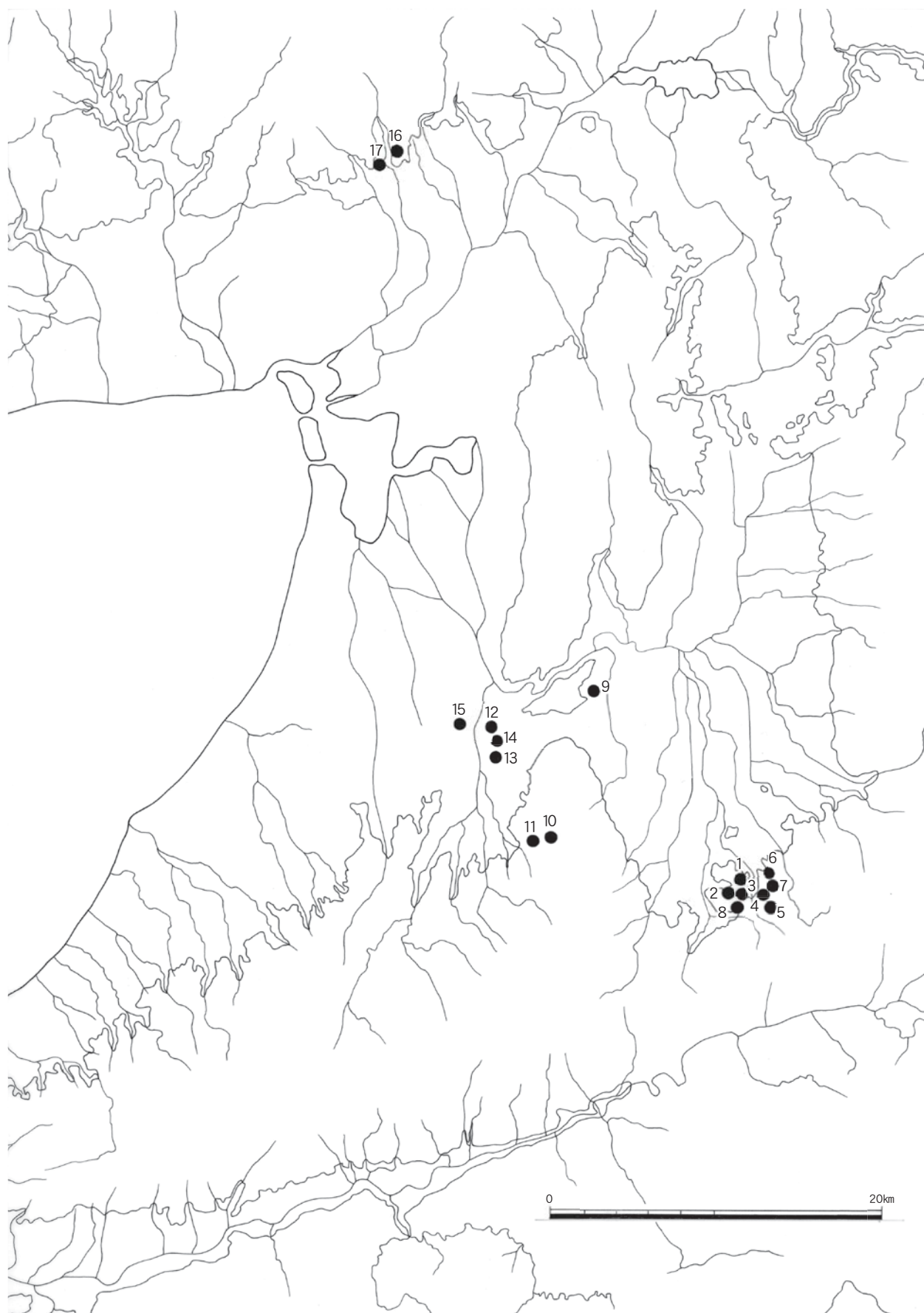


図1 棺台使用古墳分布図(番号は古墳番号と対応)

台の使用が想定されている。築造年代は7世紀末～8世紀初頃である（明日香村教委 1999、文化庁ほか 2008）。

6、野口王墓古墳（奈良県高市郡明日香村）

対辺長 39m、高さ約 7m の八角墳である。『阿不幾乃山陵記』によると埋葬施設は内陣と外陣からなる横穴式石室で、その境には金銅製の観音扉を有している。内陣の規模は長さ約 4.2m、幅約 3m、高さ約 2.4m を測る。内陣には金銅製の棺台二基が設置されており、一方には朱塗りの夾紵棺が、もう一方には蔵骨器が安置されていたとされる。二基の棺台の側面には、格狭間が設けられている。棺台の材質については金銅製と記されているが、木胎などで製作され、表面に金箔が施されていた可能性が想定される。築造年代については7世紀後半である（秋山 1979、西光 2015）。

7、中尾山古墳（奈良県高市郡明日香村）

対辺長約 20m、高さ約 4m の三段築成の八角墳である。周囲には二重のバラス敷が施されている。埋葬施設は花崗岩と凝灰岩の切石からなる横口式石槨で、内法長 90cm 四方を測る。石槨内には棺を納めることができないことから、火葬墓と考えられる。野口王墓古墳の例から蔵骨器を棺台の上に安置していることから、中尾山古墳でも棺台の存在が想定される。蔵骨器については明らかでないが、奈良県橿原市和田町古宮から出土した金銅製四環壺（宮内庁三の丸尚蔵館蔵）は表面に鳳凰をかたどった鳥形文や雲気文、唐草文が施されたもので中尾山古墳から出土したものではないかとの説もある。築造年代は8世紀初頃と考えられる（明日香村教委 1975、西口 2004）。

8、束明神古墳（奈良県高市郡高取町）

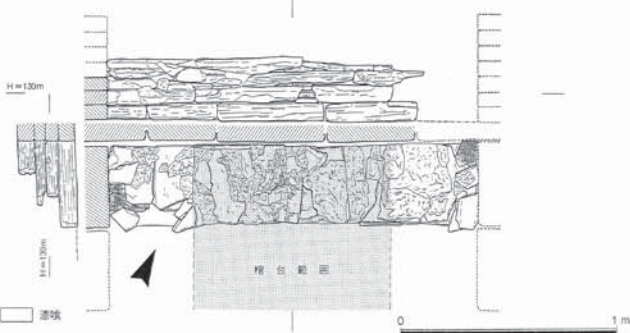
対辺約 30 m、高さ 2 m 以上の八角墳とされている。埋葬施設は凝灰岩切石を積み上げた横口式石槨で、内法は長さ 3.12 m、幅 2.06 m、高さ約 2.5 m を測る。石槨内からは飾金具・鉄釘・漆膜・歯牙などが出土している。南壁の開口部の位置や鉄釘の出土量などから、漆塗木棺は直接床面に設置せずに、木製の棺台の上に安置されていたものと考えられている。築造年代は7世紀後半である（河上編 1999）。

9、平野2号墳（奈良県香芝市）

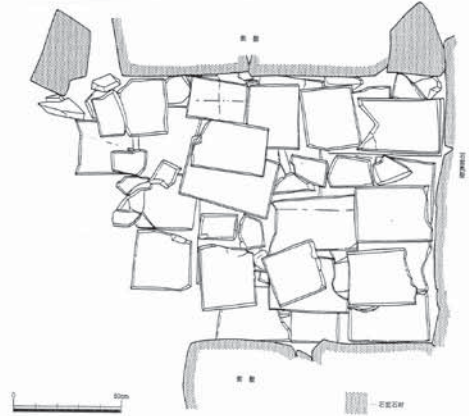
直径約 26m、高さ約 6.5m の円墳である。埋葬施設は南に開口する横穴式石室で全長約 10.6m を測る。玄室は長さ約 3.8m、幅約 2.5m、高さ約 2.2m である。床面中央には長さ約 2.1m、幅約 65cm、高さ約 12cm の棺台の基礎の上に短冊形の塼を積み上げ棺台を形成している。棺台の上には長さ約 1.84m、幅約 72cm の棺の受け台が想定されている。棺台周辺の床面も凝灰岩切石が敷き詰められている。羨道は長さ約 6.8m、幅約 2m、高さ約 1.6m で床面全体に川原石が敷き詰められており、敷石の下層には幅約 30cm、深さ約 15cm の暗渠排水溝が設けられている。出土遺物は土師器、須恵器、刀子、鉄釘などがある。築造年代は7世紀中頃である（香芝市 2005）。

10、アカハゲ古墳（大阪府南河内郡河南町）

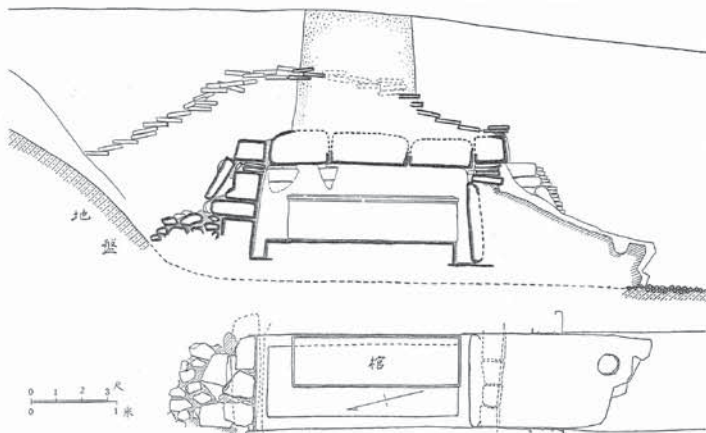
東西約 70m、南北 40m 以上の三段築成の方墳である。埋葬施設は南に開口する横口式石槨で、全長約 9.66m を測る。羨道・前室・奥室から構成されており、奥室の内法は長さ約 2.3m、幅約 1.5m、高さ約 1.14m で、入口部分には扉石のための段が設けられている。奥室床面上部は僅かに甲高に仕上げられており、中央部分は南北に長く、長さ約 1.86m、幅約 0.66m を区画して漆喰を塗った痕跡が認められる。これは、流紋岩質溶結凝灰岩の板石を組み合わせた棺台



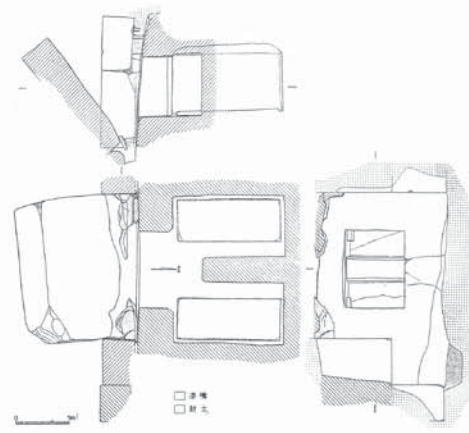
真弓テラノマエ古墳 (A-Vタイプ)



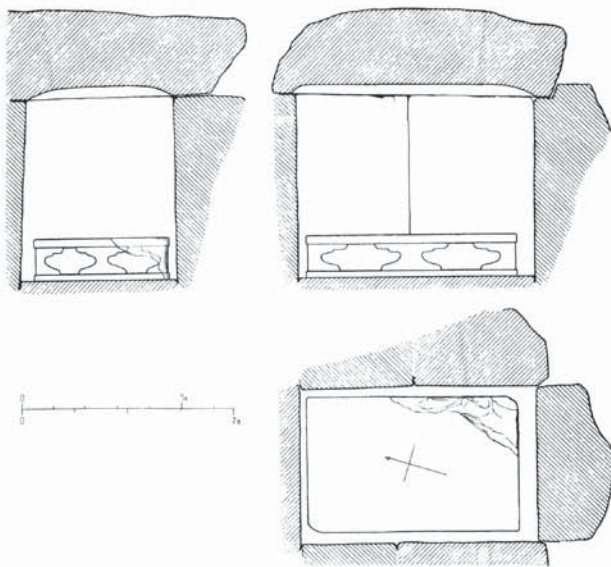
初田1号墳 (A-IIタイプ)



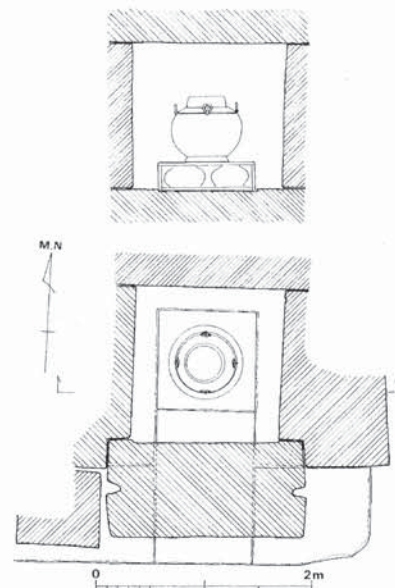
阿武山古墳 (A-Iタイプ)



牽牛子塚古墳 (A-IVタイプ)



御嶺山古墳 (A-IIIタイプ)



中尾山古墳 (B-Iタイプ)

図2 棺台使用古墳一覧

を固定するための漆喰痕と考えられる。前室は長さ約 3.4m、幅約 1.8m、高さ約 1.5m を測る。前室床面には、流紋岩質溶結凝灰岩の板石を敷き詰めている。前室と羨道の境は、流紋岩質溶結凝灰岩を東西に並べた仕切り石が存在する。羨道は長さ約 4m、幅約 1.8m、高さ約 1.15m で、羨門部には人頭大の川原石を積み上げた、閉塞石が設けられている。出土遺物は、ガラス扁平管玉や黄褐釉円面硯、漆塗籠棺、鉄釘などがある。築造年代は 7 世紀後半である（大阪府センター 2009）。

11、ツカマリ古墳（大阪府南河内郡河南町）

東西約 79m、南北中央で 14m、東側で 35m の三段築成の方墳である。埋葬施設は南に開口する横口式石槨で全長約 7.65m を測る。石室は羨道・全室・奥室から構成されている。奥室は長さ約 2.4m、幅約 1.32m 高さ約 1.32m である。奥室床面は、中央部分が甲高に仕上げられており、長さ約 2m、幅約 1m の範囲に流紋岩質溶結凝灰岩を組み合わせた棺台が設けられていたと考えられている。前室は長さ約 4.7m、幅約 1.6m、高さ約 1.6m で、奥室と前室の間には、高さ約 1.5m、幅約 1.6m、厚さ約 25cm の安山岩の扉石が設けられている。扉石の中央には直径約 8cm の円孔が穿たれている。羨道は長さ約 2m で羨門部には人頭大の川原石を用いた閉塞石が残存している。出土遺物は金製コイル状金具、銀製刀子、七宝飾金具、ガラス管、竜文金象嵌大刀片、漆塗籠棺等がある。築造年代は 7 世紀後半である（大阪府センター 2009）。

12、御嶺山古墳（大阪府南河内郡太子町ほか）

丘陵の南側斜面に位置しており、墳丘は早くに削平され詳細は不明である。埋葬施設は花崗岩を使用した横口式石槨である。内法は長さ約 2.22m、幅約 1.45m、高さ約 1.81m を測り、天井部は家形を呈している。床面には長さ約 1.98m、幅約 1.29m、高さ約 37cm の凝灰岩製の棺台が設けられている。側面には上下に框を巡らし、東西の各長辺と南辺に各二、北辺に一つの格狭間が彫刻され、朱が施されている。出土遺物は琥珀製棗玉、ガラス玉、金銅製環金具、漆塗木棺、鉄釘、人骨等がある。築造年代は 7 世紀後半である（梅原 1937）。

13、上城古墳（聖徳太子墓）（大阪府南河内郡太子町）

直径約 54m、高さ約 7.2m の円墳である。埋葬施設は南に開口する横穴式石室で、全長 12.6m を測る。石室は、玄室長約 5.4m、幅約 3m、高さ約 3m で主軸に直行するように奥壁に沿って割り抜き式石棺があり、主軸に平行するように側面に格狭間を彫刻した凝灰岩製の棺台が二基設置されている。両棺台上には夾紵棺が安置されていたとされるが、詳細については不明である。築造年代については 7 世紀前半とされる。この古墳については、中世以降に聖徳太子信仰に伴い、石室内が改変されている可能性も指摘されており、これらのデータが築造当時の姿を伝えているか定かではない（梅原 1914）。

14、鉢伏山西峰古墳（大阪府羽曳野市）

東西約 15.5m、南北約 20m、高さ 4m 以上の二段築成の方墳である。埋葬施設は南に開口する横口式石槨で、全長 7m 以上を測る。石室は羨道・前室・奥室から構成されている。奥室は長さ約 2.7m、幅約 80cm、高さ約 70cm を測る。この古墳からは土師質の短冊形を呈した埴が出土している。埴の法量は長さ約 17cm、幅約 5cm、厚さ約 1cm を測る。埴については破片となっており、用途については詳細が不明なものの、棺の下に敷かれた棺台であった可能性が考えられる。築造年代は 7 世紀中頃である（羽曳野市教委 2003）。

15、小口山古墳（大阪府羽曳野市）

直径約 14m の円墳である。埋葬施設は南に開口する割り抜き式横口式石槨である。石槨の

下部には長方形に加工した凝灰岩切石三枚を敷き詰め、台座のようになっている。石槨の周囲は石英安山岩の石材を四、五段程度積み上げて、横穴式石室状の施設を構築している。出土遺物として土師質の埴がある。埴は短辺 20cm、厚さ 1.2～2.4cm を測る。長さについては不明である。詳細については明らかではないが、石槨床面に敷き詰められた棺台であったと考えられている。築造年代は 7 世紀中頃である（羽曳野市教委 2007・2008）。

16、阿武山古墳（大阪府高槻市）

地表面には墳丘を伴わないが周囲に周濠を巡らせている。埋葬施設は花崗岩を使用した横穴式石槨である。規模は内法長約 2.6m、幅約 1.1m、高さ約 1.1m を測る。中央には長さ約 2m、幅約 80cm、高さ約 30cm の棺台が設けられている。棺台には長さ約 30cm、幅約 25cm、厚さ約 3cm の埴を 7 枚程度積み重ね、その上から厚く漆喰が塗布されている。棺台の上には長さ約 1.97m、幅約 62cm、高さ約 51cm の夾紵棺がほぼ完形の状態出土している。棺内からは南頭位の 60 歳前後の男性の人骨が一体分、完存していた。出土遺物は玉枕や冠帽などが出土している。築造年代は 7 世紀中頃と考えられる（大阪府 1936）。

17、初田 1 号墳（大阪府茨木市）

一辺約 12.7m、高さ 1.3m 以上の方墳である。埋葬施設は南に開口する横穴式石室で、残存長 2.1m を測る。奥壁幅は約 1.25m で、残存高約 78cm である。玄室床面には長さ約 52cm、幅約 30cm、厚さ約 3cm の磚を基本として、奥室に向かって右側は縦一列に並べその後、奥壁側より主軸に沿って横に用いて玄門部側へと並べている。棺台については左右両側壁より約 0.16m の空間をあけ、奥壁から主軸に沿って縦に磚を並べている。棺台の規模は長さ約 2m、幅約 80cm 程度に復元できる。出土遺物については須恵器などがある。築造年代については 7 世紀中頃である（大阪府教委 1972・関 2007）。

以上、畿内における 17 古墳の棺台使用について概観を行った。これらを見ると、棺台については材質や形態が異なっていることが明らかとなり、使用されている古墳の埋葬施設も横穴式石室より横穴式石槨に多く採用されていることがわかる。そして、上記の古墳以外でもキトラ古墳や高松塚古墳と同様の石槨構造をもつ、マルコ山古墳や火葬墓の中尾山古墳でも蔵骨器を安置する木製の棺台が想定されている。青龍寺裏山古墳（兵庫県三田市）、お亀石古墳、南坪池古墳（以上、富田林市）、一須賀古墳群、仏陀寺古墳（以上大阪府太子町）、誉田山 15 号墳（大阪府柏原市）、観音塚上古墳（大阪府羽曳野市）、陶器千塚 93 号墳（大阪府堺市）などでは埴・磚が出土している。埴・磚についてはこれまでから埋葬施設の床面や棺台への利用など、その用途について検討が行われてきたが、調査が行われておらず、埴・磚だけの出土例も少なくない。よって、ここでは調査等において、棺台使用が想定される 17 基の古墳を中心に概観を行った。管見に触れていない事例も多く、今後使用事例の増加も予想される。次に上記の事例をもとに、畿内における棺台使用古墳について、棺台の形態分類や分布状態から検討を行っていきたい。

II 棺台使用古墳の形態分類

ここでは上記で概観した棺台使用古墳について、棺台の材質や形態などからそれぞれの属性を通じて、形態分類を行っていく。

【使用形態の分類】

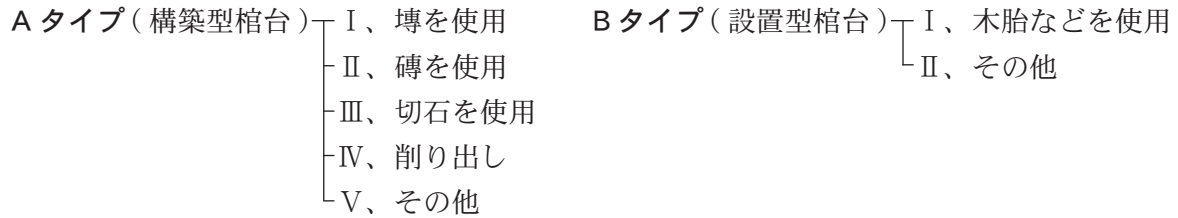
棺台については造営時に埋葬施設と一体的に設けられた「構築型棺台」と埋葬施設が完成し

た後、葬送儀礼に伴って後から設けられた「設置型棺台」とに大別することができる。

Aタイプ—構築型棺台

Bタイプ—設置型棺台

さらに、タイプ毎に属性を細分すると以下の通りとなる。



以上、棺台の使用については各属性からAタイプは5類にBタイプは2類に細分することができた。この細分からもBタイプよりAタイプの方が材質など多岐にわたっていることがわかる。また、BタイプはAタイプと異なった木胎などの材質を使用していることから、Aタイプと出現した背景が異なる可能性も考えられる。次に棺台使用古墳の分布について整理したい。

III 棺台使用古墳の分布状況

畿内における棺台使用古墳については、大和を中心に以下の四地域でまとまった分布が認められる。ここでは、各地域での棺台使用古墳の特徴について概観したい。

1、各地域の特徴

【大和】

大和では飛鳥地域でまとまった分布が認められまた、二上山東麓の葛城地域でも使用事例が確認されている。次に各地域について概観したい。

a、飛鳥地域

飛鳥地域では真弓岡や檜隈周辺に多く分布が認められる。まず、磚積式横穴式石室墳であるカツマヤマ古墳では、結晶片岩を磚状に加工して積み上げたA-IIタイプが確認されており、同じく磚積式横穴式石室墳の真弓テラノマエ古墳では、平瓦を使用したA-Vタイプの棺台が設けられている。また、牽牛子塚古墳では削り抜き式横口式石槨の床面を長方形に削りだしたA-IIIタイプの棺台が設けられている。これらをみると、横穴式石室から横口式石槨へと棺台のタイプがAタイプ(構築型)からBタイプ(設置型)へと移行していることがわかる。次に凝灰岩切石を使用したキトラ古墳や高松塚古墳、束明神古墳などでは木製のB-Iタイプの棺台が想定されており、詳細は不明ながらも野口王墓古墳では金銅製(木胎などに金箔か)の棺台があったとされる。

このように、飛鳥地域では構築型(Aタイプ)と設置型(Bタイプ)の棺台が共存していることが明らかとなった。

b、葛城地域

葛城地域では、二上山東麓に位置する横穴式石室墳の平野2号墳で、短冊形の磚を積み上げたA-Iタイプの棺台が確認されている。この古墳では、玄室内に凝灰岩切石を敷き詰めて床面としており、短冊形の磚を積み上げた棺台上には棺を安置する「受け台」が存在するなど、

河内地域のツカマリ古墳の「受け台」との関わりが注目されている。

【撰 津】

撰津地域では淀川右岸で棺台の使用が確認されている。阿武山古墳では短冊形の埴を用いたA-Iタイプの棺台が設けられており、全面に漆喰が塗布されている。初田1号墳では、流紋岩質溶結凝灰岩を磚状に、加工したA-IIタイプの棺台が使用されていたと想定されている。撰津地域では埴と磚の両方が採用されており、Aタイプの棺台が採用されていたことがわかる。

【河 内】

河内地域では二上山西麓で棺台の使用が確認されている。まず、平石谷に存在するアカハゲ古墳、ツカマリ古墳で流紋岩質溶結凝灰岩を磚状に加工して積み上げたA-IIタイプの棺台が確認されている。次に、鉢伏山西峰古墳や小口山古墳では短冊形の埴が出土しており、棺台の可能性が考えられている。また、御嶺山古墳では凝灰岩の切石を使用したA-IIIタイプの棺台があり、側面には格狭間が施されている。河内地域では棺台に使用されている材質が埴と磚、さらに凝灰岩切石と多岐にわたっており、Aタイプの棺台が採用されていることがわかる。河内地域では、この他にも二上山西麓の古墳から埴が出土していることから今後、棺台使用古墳がさらに増えることが予想される。

このように、棺台使用古墳については飛鳥地域や二上山麓周辺や撰津地域に分布していることが明かとなり、特に飛鳥地域と河内地域の両地域には、渡来系氏族が蕃居していた地域でもあることから、棺台使用古墳との関連が注目される。

2、棺台使用古墳の地域毎のタイプ

棺台使用古墳の地域毎のタイプを整理すると大和では飛鳥地域・葛城地域、撰津、河内の各地域ともにAタイプが主流をなしており、特に飛鳥地域ではA・B両タイプが存在していることが明かとなった。このようにみると、棺台使用古墳については、概ねAタイプからBタイプへ、つまり、構築型棺台から設置型棺台への流れが想定できる。

大和	飛鳥地域	A・Bタイプ
	葛城地域	Aタイプ
撰津地域		Aタイプ
河内地域		Aタイプ

表1 棺台使用古墳 地域毎タイプ一覧表

IV 棺台使用古墳の年代

次に棺台が使用された古墳の築造年代について整理したい。一般的に棺台が使用された古墳は概ね、7世紀代を通して認めることができる。そこで、棺台の使用時期を大きく三時期に分けて検討したい。

1、棺台使用古墳の年代

1期（飛鳥I～飛鳥II）

1期は棺台使用における導入期にあたる。棺台使用の初現は7世紀前半に飛鳥地域の「真弓崗・

	飛鳥Ⅰ	飛鳥Ⅱ	飛鳥Ⅲ～Ⅳ	飛鳥Ⅴ 平城Ⅰ
大和	真弓テラノマエ古墳	平野2号墳	カヅマヤマ古墳 野口王墓古墳 東明神古墳 牽牛子塚古墳	キトラ古墳 高松塚古墳
河内		鉢伏山西峰古墳 小口山古墳	アカハゲ古墳 ツカマリ古墳 御嶺山古墳	
摂津		初田1号墳 阿武山古墳		

表2 主な棺台使用古墳編年表

漆棺の種類	古墳名
夾紵棺	牽牛子塚古墳・野口王墓古墳(以上、奈・明日香村)、阿武山古墳(大・高槻市) 安福寺所蔵断片(大・柏原市)他
漆塗木棺	カヅマヤマ古墳・越塚御門古墳・高松塚古墳・キトラ古墳・マルコ山古墳(以上、奈・明日香村)、 東明神古墳(奈・高取町)、石のカラト古墳(奈・奈良市)、御嶺山古墳(大・太子町)、初田2号墳(大・ 高槻市)、岩内1号墳(和・御坊市)
漆塗籠棺	アカハゲ古墳・ツカマリ古墳・シシヨツカ古墳(以上、大・河南町) 平野塚穴山古墳(奈・香芝市)
漆塗陶棺	竜田御坊山3号墳(奈・斑鳩町)
漆塗石棺	菖蒲池古墳(奈・橿原市)

表3 主な漆棺使用古墳一覧(奈-奈良県、大-大阪府、和-和歌山県)

	古墳名	所在地	墳形	埋葬施設	棺台	棺
1	牽牛子塚古墳	明日香村	八角墳	横口式石槨	A-Ⅳ	夾紵棺
2	キトラ古墳	明日香村	円墳	横口式石槨	B-Ⅰ	漆塗木棺
3	高松塚古墳	明日香村	円墳	横口式石槨	B-Ⅰ	漆塗木棺
4	アカハゲ古墳	河南町	方墳	横口式石槨	A-Ⅱ	漆塗籠棺
5	ツカマリ古墳	河南町	方墳	横口式石槨	A-Ⅱ	漆塗籠棺
6	東明神古墳	高取町	八角墳?	横口式石槨	B-Ⅰ	漆塗木棺
7	御嶺山古墳	太子町	-	横口式石槨	A-Ⅲ	漆塗木棺
8	阿武山古墳	高槻市	円墳	横口式石槨	A-Ⅰ	漆塗木棺
9	カヅマヤマ古墳	明日香村	方墳	横穴式石室	A-Ⅱ	漆塗木棺
10	野口王墓古墳	明日香村	八角墳	横穴式石室	B-Ⅱ	夾紵棺

表4 主な棺台と漆棺使用古墳一覧

越智崗」と呼ばれた一角に築かれた真弓テラノマエ古墳で、瓦を使用したA-Vタイプの棺台が出現する。河内地域では7世紀中頃に飛鳥千塚の中に位置する鉢伏山西峰古墳でA-Iタイプの棺台が築かれ、摂津地域では淀川右岸の初田1号墳でA-IIタイプの棺台の使用が始まる。葛城地域では平野2号墳で短冊形の埴を用いたA-Iタイプの棺台の使用が確認されている。

2期(飛鳥Ⅲ~Ⅳ)

2期は多様期にあたる。河内地域では平石谷に所在するアカハゲ古墳とツカマリ古墳でA-IIタイプの棺台が構築され、磯長谷の御嶺山古墳ではA-Ⅲタイプの棺台が採用される。摂津地域では、初田1号墳の東方に位置する阿武山古墳で、A-Iタイプの棺台が使用されるようになる。飛鳥地域では、真弓テラノマエ古墳と同じ丘陵にあるカツマヤマ古墳で、A-IIタイプの棺台が採用され、「越智崗」の一角に位置する牽牛子塚古墳では、A-Ⅳタイプの棺台が採用されている。高取川左岸の「佐田崗」に位置している東明神古墳ではB-Iタイプの棺台が出現する。

3期(飛鳥Ⅴ~平城Ⅰ)

3期は衰退期にあたる。3期になると棺台の使用は飛鳥地域のみとなる。凝灰岩の横口式石槨墳である高松塚古墳やキトラ古墳でB-Iタイプの棺台の使用が認められる。火葬墓で蔵骨器が納められた中尾山古墳でも棺台が想定されており、古墳における棺台使用の終焉を迎える。

このように、棺台の使用については1期の飛鳥地域でAタイプの棺台の使用が始まり、2期になると飛鳥や二上山麓周辺、さらに摂津や河内地域でAタイプの使用が広がりを見せるようになる。さらに、飛鳥地域では新たにBタイプの棺台が出現するなど多様期をむかえる。そして、3期になると、これまで採用されていたAタイプの棺台は姿を消し、Bタイプの棺台のみが飛鳥地域で採用されることとなる。次に各期を通じて、材質から棺台をみると、埴・磚といった土製や石製の棺台が1期から2期で使用されはじめ、2期から3期にかけて木製の棺台へと変化していくことから、棺台の変遷は大きく土製から石製へ、そして木製などへの流れが想定できるようになった。これは、導入期のAタイプ(構築型棺台)から始まり、多様期から衰退期にかけてBタイプ(設置型棺台)へと変遷する棺台の性格を考える上でも重要である。

V 棺台使用古墳と漆棺

次に棺台を備えた古墳については、棺台に安置されている棺の多くが、夾紵棺や漆塗木棺など漆を使用した棺(以下、漆棺)であることが確認されている。よって、ここでは棺台の使用と棺形態さらに、埋葬施設の床面構造の関係について整理・検討を行っていきたい。

まず、畿内において漆棺が使用されている事例は19古墳1遺跡(1古墳は伝承)で確認されている。その内訳は、夾紵棺が4例、漆塗木棺が10例、漆塗籠棺が4例、漆塗陶棺と漆塗石棺が各1例と漆塗木棺の使用が多いことがわかる。

1、棺台使用と漆棺使用古墳の種類

次に棺台使用古墳と漆棺使用古墳の関係について検討したい。棺台については使用されている材質から前項でも検討したように、棺台を大きく土製や石製を使用した構築型棺台のAタイプと木胎などを使用した設置型棺台のBタイプに大別することができる。

Aタイプ 埴・磚などを使用

Bタイプ 木胎などを使用

さらに、棺台使用古墳と漆棺使用古墳をみると、埋葬施設の床面に敷石を伴っている例が多く、棺台と漆棺使用との関係が深いことがわかる。次に使用されている棺について漆棺（夾紵棺・漆塗木棺など）とそれ以外の棺に細分することとする。

①、漆棺（夾紵棺・漆塗木棺）

②、木棺

そして、棺台・床石・漆棺を使用する古墳をタイプ別に整理すると以下ようになる。

A-①タイプ 棺台（有）+床石+漆棺、A-②タイプ 棺台（有）+床石+木棺

B-①タイプ 棺台（有）+床石+漆棺

（B-②タイプ（棺台（有）+床石+木棺）については現在のところ確認されていない。）

以上、上記の二つのタイプから棺台使用古墳と漆棺の関係を整理すると、棺台を有する埋葬施設には床石が施されており、更に棺台の上には、漆棺が採用されている事例が多い。また、AタイプとBタイプのいずれも床石の上に棺台が設けられていることや、棺を床面よりも高い所へ安置していることから、木製等の棺を敷石のない床面に直接安置していないことがわかる。

このように、AタイプとBタイプの棺台については、漆棺使用や埋葬施設の敷石との関係から構築型と設置型でそれぞれ相関関係がみとれる。Aタイプ（構築型棺台）については、例えば、御嶺山古墳で横口式石槨内に凝灰岩製の棺台（一石造）が設置されており、阿武山古墳やカヅマヤマ古墳では、玄室中央に埴・磚積の棺台が構築され、漆喰が全面に塗布されている。また、Aタイプの棺台について材質は異なるものの埴・磚や凝灰岩などを使用しており、それに対してBタイプ（設置型棺台）は木製の棺台等が想定されるなど、二つのタイプが同じ系譜上にある棺台であるのかが、棺台使用古墳の造営された背景や被葬者像を考える上で重要と考える。そこでまず、棺台と石室を構成する石材の関係について考えてみたい。

VI 棺台使用石材と石室材の関係

棺台使用石材と石室材の関係については、飛鳥地域にある7世紀後半に築かれたカヅマヤマ古墳では、棺台使用石材と石室材が結晶片岩と同様であるのに対して、それ以外の古墳ではそれぞれ材質が異なっていることが表5からも明らかである。その中で、7世紀前半から中頃にかけて、結晶片岩と同じ板状石材の榛原石が棺台に採用されるようになる。榛原石については、桜井地域の段ノ塚古墳をはじめ舞谷古墳群など、終末期古墳の石室や葺石材としても使用されている。これは結晶片岩同様、板状節理を利用して加工された板石で、棺台使用に適していることがわかる。しかし、7世紀後半以降になると、これまで使用されてきた結晶片岩や榛原石の板石ではなく、凝灰岩製の棺台へと材質が変化していく。さらに、7世紀末になると棺台は凝灰岩製から木製へとこれまでの土製や石製と異なった材質へと変えていく。その一方、石室や石槨材については、飛鳥地域の事例をみると7世紀後半頃にはこれまでの硬質の石英閃緑岩や花崗岩から軟質の凝灰岩へと変化していることから、棺台に木製が採用されはじめた時期には凝灰岩製の棺台は姿を消していく。これは、凝灰岩を使用した棺台から凝灰岩を使用した石槨へと石材の用途が変化していることから、木製棺台の出現した背景には凝灰岩製の組合せ式横口式石槨墳の出現と大きく関わっているものと考えられる。これは御嶺山古墳で花崗岩（石槨）+凝灰岩（棺台）であったものが、牽牛子塚古墳では凝灰岩+凝灰岩となり、束明神古墳では凝灰岩+木製へと変遷していることがわかる。石槨材については、花崗岩などから凝灰岩への流れがみられ、棺台材についても、凝灰岩から木製などへと変化していることがわかる。これ

	古墳名	所在地	埋葬施設	棺台(材質)	タイプ	漆棺
1	野口王墓古墳	明日香村	横穴式石室	金銅製?	A-①	夾紵棺
2	牽牛子塚古墳	明日香村	横口式石槨	凝灰岩	A-①	夾紵棺
3	聖徳太子墓	太子町	横穴式石室	凝灰岩?	-	夾紵棺?
4	御嶺山古墳	太子町	横口式石槨	凝灰岩	A-①	漆塗木棺
5	阿武山古墳	高槻市	横口式石槨	埴	A-①	夾紵棺
6	カヅマヤマ古墳	河南町	横穴式石室	埴	A-①	漆塗木棺
7	ツカマリ古墳	河南町	横口式石槨	埴	A-①	漆塗籠棺
8	アカハゲ古墳	河南町	横口式石槨	埴	A-①	漆塗籠棺
9	鉢伏山西峰古墳	羽曳野市	横口式石槨	埴	A-②	木棺
10	平野2号墳	香芝市	横穴式石室	埴	A-②	木棺

表5 Aタイプ古墳一覧

	古墳名	所在地	埋葬施設	棺台(材質)	タイプ	漆棺
1	東明神古墳	高取町	横口式石槨	木製	B-①	漆塗木棺
2	マルコ山古墳	明日香村	横口式石槨	木製	B-①	漆塗木棺
3	キトラ古墳	明日香村	横口式石槨	木製	B-①	漆塗木棺
4	高松塚古墳	明日香村奈	横口式石槨	木製	B-①	漆塗木棺
5	石のカラト古墳	奈良市	横口式石槨	-	-	-
6	平野塚穴山古墳	香芝市	横口式石槨	-	-	-
7	シシヨツカ古墳	河南町	横穴式石室	-	-	漆塗籠棺
8	初田2号墳	高槻市	横穴式石室	埴?	-	-
9	岩内1号墳	御坊市	横穴式石室	-	-	漆塗木棺

表6 Bタイプ古墳一覧

	古墳名	石室材	棺台材		古墳名	石室材	棺台材
1	真弓テラノマエ古墳	結晶片岩	瓦	9	カヅマヤマ古墳	結晶片岩	結晶片岩
2	阿武山古墳	花崗岩	埴	10	御嶺山古墳	花崗岩	凝灰岩
3	平野2号墳	花崗岩	埴	11	牽牛子塚古墳	凝灰岩	凝灰岩
4	鉢伏山西峰古墳	石英安山岩	埴	12	野口王墓古墳	石英閃緑岩	金銅製?
5	小口山古墳	凝灰岩	埴	13	東明神古墳	凝灰岩	木製
6	初田1号墳	花崗岩	榛原石	14	キトラ古墳	凝灰岩	木製
7	アカハゲ古墳	花崗岩	榛原石	15	高松塚古墳	凝灰岩	木製
8	ツカマリ古墳	花崗岩	榛原石	16	中尾山古墳	石英閃緑岩 凝灰岩	木製?

表7 棺台材と石室材

らの古墳の中には大王墓とされるものも含まれており、当該期の棺台使用古墳の被葬者像を考える上でも重要である。特に野口王墓古墳や牽牛子塚古墳については埋葬施設内に棺台が並んで設置されており、棺台を有する他の終末期古墳が単葬墓であるのに対して、野口王墓古墳や牽牛子塚古墳が複葬（合葬）墓でありまた、二つの古墳は大王墓（天皇陵）である蓋然性が高いことなど、棺台が採用された背景や合葬墓である点など、当該期が律令国家形成に向けた成熟期にもあたることから、東アジア情勢との関わりの中で、棺台使用古墳について検討を行っていききたい。

Ⅶ 韓半島における棺台使用古墳の様相

韓半島において高句麗・百済・新羅の各国で棺台を使用した古墳が多く確認されている。棺台の型式については百済の事例から玄室床面が羨道部よりも一段高くなるように磚が敷き詰められた「前面棺台」と玄室中央部に模塼石を敷き詰めた「模塼石棺台」、さらに玄室床面に長板石を設置した「長板棺台」に分類されている（姜 1984）。次に韓半島における棺台使用古墳について、使用形態等から分類を行っていききたい。

1、使用形態の分類

棺台の使用形態については、材質を中心に以下のⅣタイプに大別することができる。

Ⅰタイプ 板状石材で構成されたもの

Ⅱタイプ 塼・磚で構成されたもの

Ⅲタイプ 割石や板石積みで構成されたもの

Ⅳタイプ その他

以上、韓半島の棺台の事例をⅣタイプに大別し、さらに各タイプを細分すると以下のようなになる。

《Ⅰタイプ》

a、板状の一枚石を設置したもの

b、板状の石材を数石並べたもの

c、板状の石材の下に直交した脚石などを有するもの

《Ⅱタイプ》

a、塼・磚を長方形の台状に積み上げたもの

b、玄室床面全体を羨道より一段高く、塼・磚で敷き詰めたもの

《Ⅲタイプ》

a、棺台上にバラスや板石を敷いたもの

b、棺台上に石枕や足坐のあるもの

c、漆喰が塗布されているもの

以上のように、韓半島における棺台使用古墳については、Aタイプの「設置型棺台」を採用されていることが明らかとなった。

2、高句麗・百済・新羅のタイプ別、棺台使用古墳概観

次に、韓半島における高句麗・百済・新羅の三国について、主な棺台使用古墳をまとめると表8のようになる。韓半島には多くの古墳が造営されているが、すべての古墳において棺台が

採用されているものではなく、また棺台を使用した古墳の中には王陵も含まれることが注目される。ここではまず、韓半島における棺台使用古墳について概観したい。

棺台使用古墳については、これまで多く確認されているが、詳細が不明なものも多く、ここでは看見にふれた主な棺台使用古墳について取り上げ、各国における棺台使用古墳をタイプ別に整理を行った。以下、各国の動向についてみていく。

	古墳名	国名	タイプ		古墳名	国名	タイプ
1	万宝汀 1368 号墳	高句麗	I-a	23	大宝面 7 号墳	高句麗	I-c
2	環文塚	高句麗	I-a	24	陵山里 5 号墳	百 済	I-c
3	米倉溝 1 号墳	高句麗	I-a	25	陵山里 6 号墳	百 済	I-c
4	將軍塚	高句麗	I-a	26	宋山里 5 号墳	百 済	II-a
5	兔山下 41 号墳	高句麗	I-a	27	宋山里 6 号墳	百 済	II-a
6	徳興里古墳	高句麗	I-a	28	宋山里 29 号墳	百 済	II-a
7	牟頭婁塚	高句麗	I-a	29	陵山里 1 号墳	百 済	II-a
8	長川 1 号墳	高句麗	I-a	30	東下塚	百 済	II-a
9	四神塚	高句麗	I-a	31	武寧王陵	百 済	II-b
10	高山洞 14 号墳	高句麗	I-a	32	陵山里 2 号墳	百 済	II-b
11	寺洞古墳	高句麗	I-a	33	梁山夫婦塚	新 羅	III-a
12	土浦里大塚	高句麗	I-a	34	慶州 151 号墳	新 羅	III-a
13	土浦里 6 号墳	高句麗	I-a	35	普門里夫婦塚	新 羅	III-a
14	益山大王墓	百 済	I-a	36	於宿知述王墓	新 羅	III-a
15	中上塚	百 済	I-a	37	忠孝里 8 号墳	新 羅	III-a
16	舞踊塚	高句麗	I-b	38	忠孝里 4 号墳	新 羅	III-a
17	角抵塚	高句麗	I-b	39	忠孝里 10 号墳	新 羅	III-a
18	陵山里 7 号墳	百 済	I-b	40	忠孝里 9 号墳	新 羅	III-a
19	鎧馬塚	高句麗	I-c	41	忠孝里 5 号墳	新 羅	III-a
20	長山洞 1 号墳	高句麗	I-c	42	九政洞方形墳	新 羅	III-a
21	江西大墓	高句麗	I-c	43	西岳里石室墓	新 羅	III-b
22	漢王墓	高句麗	I-c	44	双床塚	新 羅	III-b

表 8 韓半島における主な棺台使用古墳一覧

《高句麗》

高句麗での棺台使用古墳の特徴として、板状の石材を使用した棺台が採用された傾向がみられる。高句麗において一枚石を使用することが、棺台としての要素の一つとして重要であったことがわかる。

《百 済》

百済では I ~ II タイプの両タイプの棺台が採用されている。古墳の立地や造営時期などにもよるが、王陵群とされる古墳に埴・磚を多用した II タイプの棺台が採用されている点が注目される。

《新 羅》

新羅の棺台は、高句麗や百済の棺台と様相を異にしており、III タイプの棺台が採用されてい

る。特に石枕や足坐など棺台の性格を知る上で興味深い事例が確認されている。

以上のように、韓半島におけるタイプ別、棺台使用古墳の傾向について概観してみた。その中で各国の棺台使用の傾向については概ね、高句麗ではⅠタイプ、百済ではⅠ～Ⅱタイプ、新羅ではⅢタイプとそれぞれ主流をなしており、各国における棺台使用の傾向が明らかとなった。これらの傾向について、さらに古墳の造営年代から検証していく。

3、棺台使用古墳の造営年代

次に、高句麗・百済・新羅における主な棺台使用古墳の築造年代について概観したい。

＜高句麗＞

高句麗では4世紀代に万宝汀1368号墳で、右片袖式の横穴式石室内の奥壁から、右側壁にかけて板状石材を配したⅠ-aタイプの棺台が設置されている。それ以降になると、4世紀の中頃から後半にかけての環文塚で、玄室のほぼ中央に方形を呈したⅠ-aタイプの棺台があり、4世紀末から5世紀初めにかけての米倉溝1号墳では、二棺並列のⅠ-aタイプの棺台の使用が認められる。5世紀に入ると、將軍塚の玄室内に並列する棺台が設置され、これは縁が高く受け台状のような形を呈したⅠ-aタイプの棺台である。5世紀後半になると、兎山下41号墳で玄室の中央部に長方形を呈した、Ⅰ-aタイプの棺台が設置されている。6世紀初め頃になると長山洞1号墳で、両袖式の横穴式石室の玄室奥壁に沿って、主軸に直交した脚部を有するⅠ-cタイプの棺台が出現する。また、同じ頃に築かれた四神塚では、主軸に直行した棺台2基と主軸に平行するⅠ-aタイプの棺台が設置されている。6世紀後半には高山洞14号墳や寺洞古墳で、両袖式横穴式石室式の主軸に平行するようにⅠ-aタイプの棺台が二基、設置されている。

このように、高句麗では4世紀から6世紀にかけて棺台の使用が認められ、棺の配置についても主軸に平行した二棺並列が多く、6世紀代に入って主軸に直交した棺台配置もみられるようになる。上記の例からもわかるように4世紀から6世紀にかけて、高句麗においてⅠタイプの棺台が採用されている点が注目される。

＜百 済＞

次に百済の棺台使用古墳についてみていきたい。百済では、6世紀初の宋山里5号墳で、右片袖式穹窿状横穴式石室で、主軸に平行した2基のⅡ-aタイプの棺台が確認されている。6世紀中頃になると、宋山里6号墳で塼積みの両袖式横穴式石室あり、左側壁に沿ってⅡ-aタイプの棺台1基が設置されている。この古墳の壁面には四神図が描かれており、羨道前壁に「梁の官瓦もて師と為す」の銘塼がある。また、武寧王陵では塼積みの横穴式石室で、玄門部から約1mの部分から一段高くなり、塼を網代状に敷き詰めたⅡ-bタイプの塼敷きが認められる。これは棺台とみるよりも、棺床的要素が強いと考えられる。棺床上には主軸に沿ったコウヤマキ製の木棺が2基安置されており、左側壁側に百済斯麻王が、右側壁側に百済国王太后が葬られていたことが出土した墓誌で明らかとなっている。次に中上塚では花崗岩の板石から構成された両袖式の石室で平斜式の天井を有している。玄室の中央には板石を用いたⅠ-aタイプの棺台が設置されている。6世紀後半になると、宋山里29号墳の塼積み式右片袖式の横穴式石室で、塼を網代状に敷かれた玄室床面上に、主軸に沿って並列したⅡ-aタイプの棺台が2基、設置されている。6世紀後半から7世紀初頃の東下塚では、切石を用いた両袖式石室で、玄室床面には方形を呈した板石を敷き詰め、玄室中央には床石と同じ板石を用いて、小口と側面に

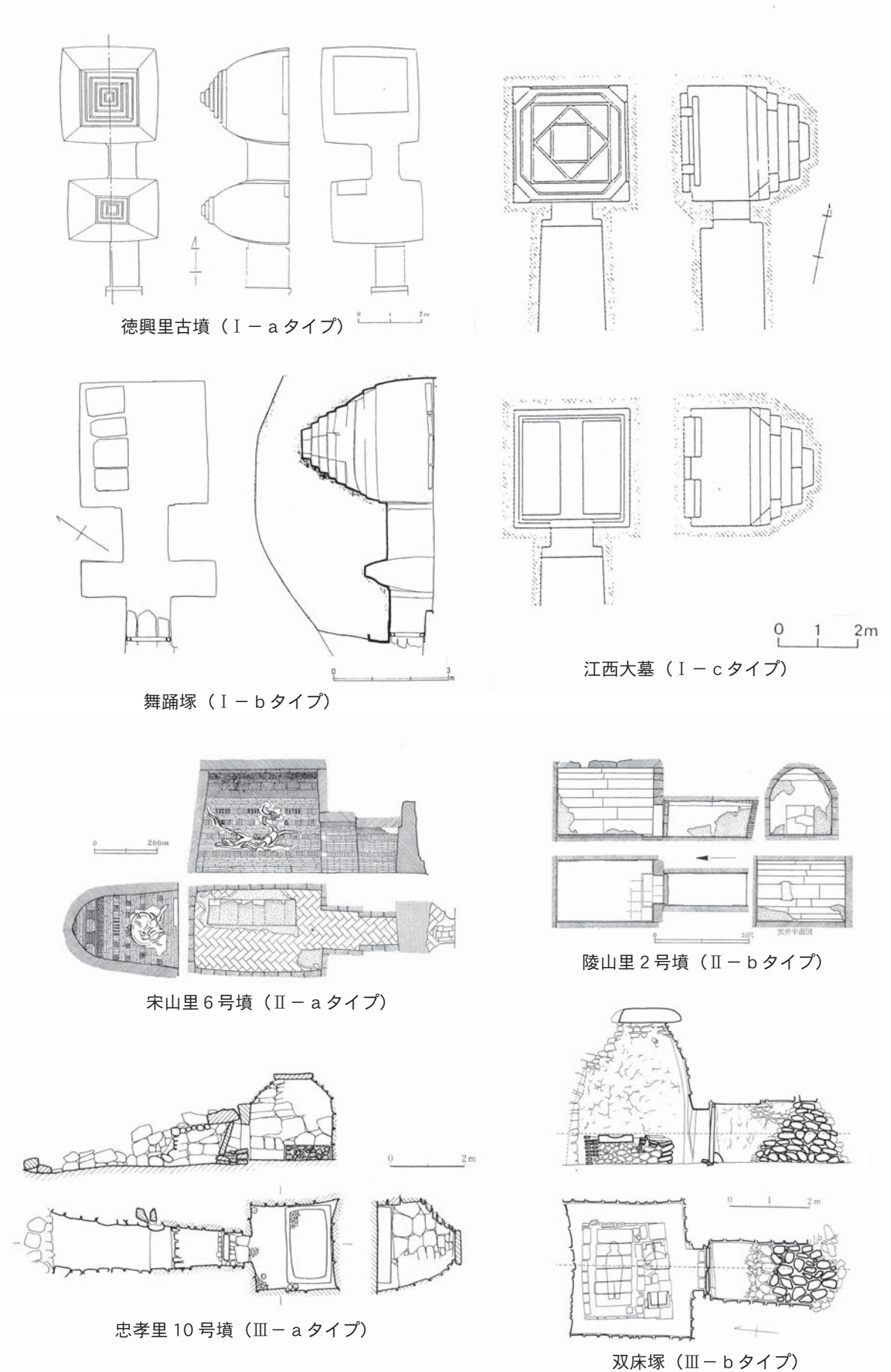


図3 韓半島における棺台使用古墳一覧

板石を立て並べ、その上は板石が蓋になるように敷き詰めたⅡ－bタイプの棺台が設けられている。7世紀前半になると、益山大王墓の埋葬施設で、切石を用いた両袖式石室があり、平天井を有した玄室の中央には板石を用いたⅠ－aタイプの棺台が設置されている。棺台の上にはコウヤマキ製の木棺が出土している。このように、百済では6世紀から7世紀にかけて、埴・磚を用いた棺台や中国南朝の影響を受けた埴積式古墳など、他地域の影響を受けた古墳が出現している点が注目される。また、韓半島では自生していない、コウヤマキを棺に採用するなど倭国との地域間交流を示す資料も棺台の系譜を考える上で重要である。

《新 羅》

次に新羅の棺台使用古墳についてみていく。新羅では、6世紀前半の梁山夫婦塚で、竪穴系横口式石室の玄室の中央部に右側壁から左側壁にかけて、主軸に直交するⅢ－aタイプの棺台が設置されている。6世紀の中頃には慶州151号墳で、竪穴系横口式石室の玄室中央から、奥壁にかけて主軸に直交したⅢ－aタイプの棺台が設置されている。この棺台については、数次にわたってつぎ足されており、最終的には全面が棺台状を呈することとなる。また、西岳里石室墓では両袖式横穴式石室の玄室に方形に造られたⅢ－bタイプの棺台があり、上面に石枕や足座が設置されている。このタイプでは、棺台上に棺を安置せず、遺体を直接棺台上に安置していることがわかる。これは6世紀中頃から後半に築かれた双床塚でも同様の事例が確認されている。6世紀後半になると、普門里夫婦塚の右片袖式横穴式石室で、右側壁に接するようにⅢ－aタイプの棺台が設けられている。7世紀前半には、於宿知述干墓で竪穴系横口式石室の左片袖部分にⅢ－aタイプの棺台が主軸に平行して設置されている。7世紀中～後半にかけて忠孝里9号墳では、左片袖式の横穴式石室の袖部に主軸に沿ったⅢ－aタイプの棺台が設けられている。8世紀中頃に築かれた九政洞方形墳では、右片袖式横穴式石室の袖部に、台座状に板石を組み上げたⅢ－aタイプの棺台が設置されており、側面には格狭間が彫られている。

このように、新羅では6世紀から8世紀にかけて、割石や板石を利用した棺台が採用されていることがわかる。その中で、棺台の上に棺を安置せず、遺体を直接棺台上に安置している事例や仏像の台座のように板石を組み上げて、側面に格狭間を配する事例など、高句麗や百済とは異なるタイプの棺台が出現しており、注目される。

以上、韓半島における棺台使用古墳について概観をおこなった。韓半島においては横穴式石室の受容とともに、高句麗では4世紀代の古墳から棺台の使用がはじまり、新羅の九政洞方形墳の8世紀中頃まで、一貫して「構築型棺台」が採用されていることが明かとなった。これは、棺台使用古墳の造営された背景が各国、各時代に応じてそれぞれ異なった歴史的背景のもと造営されたことが影響していると考えられるが、倭国におけるBタイプの「設置型棺台」が韓半島の古墳に採用されていなかったのか、棺台が木胎などの性質のため、発掘調査で明らかとなっていないだけなのか今後の調査・研究に委ねたいが、現時点ではAタイプの「構築型棺台」が韓半島における棺台形態として広く、採用されていた点は注目される。

4、韓半島における棺台の配置について

次に棺台の配置について検討したい。韓半島における棺台の使用については、石室の主軸に平行するように二棺分並列されている例(東上塚・宋山里5号墳・宋山里29号墳他)や主軸に平行して一棺分設置されている例(中上塚・東下塚・益山大王墓他)が確認されている。基本的には複数埋葬が主で、二棺並列埋葬となっている場合が多い。また、単葬墓の場合は玄室中

央に、棺台が設置されている。棺配置については、複葬か単葬かで埋葬施設の平面形が概ね正方形か長方形に区分することができる。埋葬施設が正方形で、棺台がどちらかの壁面に寄って設置されている場合は、後に追葬などが計画されていた可能性が考えられる。また、当初は一基分の棺台であったが、その後の追葬に伴い、当初の棺台に増設して棺台床面積を増やしている例（増設型棺台）も存在している。また、西岳里石室墓にある方形の棺台の上には、主軸に直交するように2人分の石枕と足座があり、並列安置した事例も確認されている。このように、韓半島における棺台使用古墳については単葬墓も存在するものの、概ね複数埋葬が主で、二棺並列埋葬を採用している傾向が明かとなった。

2 おわりに ～律令国家形成期における棺台の意義～

今回、7世紀代の終末期古墳の棺台使用古墳について整理を行い、韓半島との比較検討行ってきた。棺台については、7世紀全般を通じて埴・磚などを用いた構築型の棺台と木胎などと考えられる設置型の棺台とに大別を行った。その過程で、それぞれの棺台には漆棺や埋葬施設の床面に敷石が存在することが明らかとなり、構築型と設置型の棺台については共通的な埋葬形態を有していたことも判明してきた。また、構築型の棺台については7世紀前半から後半にかけて、設置型の棺台は7世紀後半に出現していることから、それぞれの棺台の系譜を検証する上で韓半島の事例の整理・検討を行った。韓半島では4世紀から8世紀にかけて棺台が採用されており、まず高句麗では4世代から6世紀に、百済では6世紀から7世紀にかけて、さらに新羅では6世紀から8世紀にかけてと、棺台使用古墳の造営年代が高句麗、百済、新羅といった順に展開していることが明らかとなった。これは、韓半島における三国の興隆と大きく関わっているものと考えられる。そして、韓半島で使用されている棺台については、構築型棺台であることが明らかとなり、我が国においても、導入期の棺台使用古墳が、7世紀前半の単葬墓で、構築型の棺台が出現していることから、韓半島からの影響が想定される。飛鳥で最初に棺台が採用された真弓テラノマエ古墳が、磚積石室墳であったことや、百済の武寧王陵の埴積の石室形態が中国の南朝の影響を受けているとされ、棺についてはコウヤマキを採用するなど倭国との密接な関わりも注目される。このように、韓半島における棺台の使用については、韓半島の各国における墓制の変革と中国などの影響を受けて発展したものとが混在しているものの、時代の経過とともに、複葬墓（二棺並列埋葬）から単葬墓へと薄葬化の流れの中で変遷していることがわかる。このような韓半島の墓制の変化は、倭国の墓制にも大きく影響をもたらしたと考えられる。特に百済では王陵にも棺台が採用されていることから、倭国の棺台使用古墳の被葬者像を考える上で重要である。こういった流れの中で、倭国においては、7世紀後半に至って新たに木製などの棺台が出現する。韓半島において、現時点で木製などの棺台は確認されていないことから、倭国で新たに創出されたものと考えられる。特に、木製などの棺台が採用された7世紀後半以降は、律令国家形成期でもあり、これまでの「構築型棺台」から脱却した新たな装置として、木製などの棺台が採用された可能性が考えられる。その背景には、律令国家成立に向けた墓制の再編が影響しているものと考えられる。これは、同時期に硬質の石英閃緑岩や花崗岩の横口式石槨から軟質の凝灰岩を使用した横口式石槨の出現が、律令国家形成に向けた新たな埋葬形態として、重要な役割を担っていたことがわかる。これらを考える上で、牽牛子塚古墳と野口王墓古墳が挙げられる。牽牛子塚古墳は飛鳥地域で最初に築かれた凝灰岩製の横口式石槨の合葬墓で、棺台は主軸に沿った二棺並列であり、野口王墓古墳はこれに続く石英

閃緑岩を用いた横穴式石室で、夾紵棺と蔵骨器が並列して埋葬された合葬墓である。韓半島の棺台使用古墳の多くが同一埋葬空間での合葬墓で、二棺並列である様相は飛鳥の大王墓(天皇陵)とされる二つの終末期古墳の埋葬形態との関わりを考える上で注目される。さらに、野口王墓古墳では『阿不幾乃山陵記』に夾紵棺と蔵骨器が金銅製の棺台に安置されていることが記されている。この金銅製の棺台については、木胎などに金箔が施された棺台であったと考えている。ここで注目したいのは、野口王墓古墳の棺台が「構築型」から「設置型」へと移行している点である。さらに、設置型の棺台が金銅製と表記されるように、構築型の棺台よりもさらに荘厳化させ、「クリカタ」などの装飾が施されている点が注目される。これは、御嶺山古墳においても横穴式石槨内に凝灰岩製の棺台があり、側面には框を巡らし、格狭間が表現されるなど、まさに「構築型棺台」から「設置型棺台」への過渡期の様相を呈しており、7世紀後半以降の棺台の様相を知る上で重要である。さらに、凝灰岩製の組合せ式横穴式石槨墳では土製や石製の棺台ではなく、木製などの設置型の棺台が採用されている。野口王墓古墳では夾紵棺と火葬骨を納めた蔵骨器が併存するなど、これまでの様相とは異なっていることから、律令国家形成と墓制の変革とが大きく影響しているものと考えられる。つまり、夾紵棺が安置された「棺台」と火葬骨を蔵骨器におさめて設置された「台」では、棺台の質的変化を読み取ることができるのである。ここで重要なのは「棺」の存在である。被葬者を納棺することで現世との決別や隔絶を促し、来世へと導く仮の段階を迎える。さらに、遺体を収めた棺はモガリなどの一定期間を経て、古墳の埋葬施設に安置される。この間、遺体は物質的変化とともに骨化へのプロセスを棺の中で経ることとなる。この工程は被葬者の現世からの分離と来世との統合化を確認する重要な儀礼である。さらに、棺は葬送儀礼に伴って、被葬者の遺体を安置し、殯宮などから墓所まで運搬する容器としての役割も担っている。棺は、被葬者の職掌や身分を反映させたものであることから、棺自体、被葬者を具現化したものであり、棺と遺体は一体(棺=遺体)をなしていることから、床面(地面)に直接安置するのではなく、現世の地上界より、一段高い場所に安置することによって、被葬者を来世へと導く装置の役割を棺台が担っていたと考えられる。これは、殯宮や喪屋などで一定期間安置した後、墓所へ運びやすくするため、台状の施設に安置している民族事例(斎藤 1987)もあることから、殯宮や喪屋にあった棺を安置する施設を、石室や石槨を喪屋などにみたと、棺を安置する施設を「棺台」として構築されたものと考えられることができる。

このように、棺台は被葬者が納棺され、現世からの分離と隔絶、さらに骨化へのプロセスを棺台と棺とが一体をなすことに重要な意味があったことから、別の場所で骨化のプロセスを経た火葬骨を容器に納めて設置された野口王墓古墳では、これまでの「棺台」としてではなく、蔵骨器を置く「台」としての役割に変化していることがわかる。つまり、7世紀後半の「設置型棺台」は、荘厳かつ艶やかに埋葬施設で、棺や蔵骨器を安置するために創出された葬具「台」としての役割へと変化していったことがわかる。このように、律令国家形成期における棺台の使用については、7世紀全般を通じて、同じ思想のもとに棺台が採用されたものではなく、7世紀前半の導入期の「構築型棺台」の系譜を韓半島に求め、多様期を経て7世紀後半以降に出現した「設置型棺台」は、律令国家形成の成熟とともに新たに創出された、荘厳な葬具としての役割を担うこととなる。これは、7世紀において出現した「棺台」が、これまで古墳時代から横穴式石室内において複数埋葬が行われ、前代被葬者との決別を意味する「片づけ」行為(森岡 1983)など、埋葬空間における死穢観が、棺を直接石室床面に設置するのではなく、人頭大

の石材などを床面と棺の間に介在させる「受け石(台)」を採用した背景とは大きく異なっている。つまり、6世紀後半から7世紀にかけて、東アジアの枠組みの中で、新しい死生観が中国や韓半島から倭国へもたらされ、律令国家形成の成熟とともに、伝統的な葬送理念や精神文化と融合しながら、独自に発展したものと考える。棺台の変遷はまさに、律令国家形成の歩みとともに軌を一にして終焉を迎えることとなる。

以上、長々と棺台使用古墳の歴史的な背景について検討を行ってきた。筆者の力量不足で中国大陸の事例には言及することができなかった。また、韓半島における棺台の出現した背景など今後も継続して整理・検討を行いたいと考えている。今回の小稿が棺台使用古墳を考える上でたたき台となってくれば幸いである。皆様の忌憚無きご批判・ご意見を賜らんことを節に希望して筆をおきたい。

【引用・参考文献】

- 明日香村教育委員会 2013 『牽牛子塚古墳発掘調査報告書』明日香村文化財調査報告書 第10集
- 秋山日出雄 1979 「檜隈大内陵の石室構造」『橿原考古学研究所論集』第5 吉川弘文館
- 網干善教他 1975 『史跡中尾山古墳環境整備事業報告書』明日香村教育委員会
- 伊藤聖浩 2003 「鉢伏山西峰古墳」『羽曳野市内遺跡調査報告書－平成5年度－』羽曳野市埋蔵文化財調査報告書 50 羽曳野市教育委員会
- 梅原末治 1914 「聖徳太子磯長の御廟」『聖徳太子論纂』平安考古会
- 梅原末治 1937 「河内磯長御嶺山古墳」『近畿地方古墳墓の調査』2 日本古文化研究所報告 4 吉川弘文館
- 大阪府 1936 『摂津阿武山古墳墓調査報告』
- 大阪府文化財センター 2009 『加納古墳群・平石古墳群』
- 岡林孝作 2008 「高松塚古墳の木棺と棺台」『月刊文化財』532号 文化庁
- 香芝市教育委員会 2005 『平野2号墳－葛城地域北部における終末期古墳の調査』香芝市文化財調査報告書 第6集 香芝市教育委員会
- 河上邦彦 1999 『東明神古墳の研究』高取町文化財調査報告第18冊 高取町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所)
- 姜仁求 1984 『百濟古墳研究』学生社
- 齊藤 忠 1987 『東アジア葬・墓制の研究』第一書房
- 西光慎治他 1999 『キトラ古墳学術調査報告書』明日香村教育委員会
- 西光慎治他 2007 『カヅマヤマ古墳発掘調査報告書』明日香村文化財調査報告書 第5集 明日香村教育委員会
- 西光慎治 2007 「カヅマヤマ古墳をめぐる諸問題・棺台の意義」『カヅマヤマ古墳発掘調査報告書』明日香村文化財調査報告書 第5集 明日香村教育委員会
- 西光慎治 2011 「真弓テラノマエ古墳の調査」『明日香村遺跡調査概報 平成21年度』明日香村教育委員会
- 西光慎治編 2012 「真弓テラノマエ古墳の研究」『明日香村文化財調査研究紀要』第11号 明日香村教育委員会
- 西光慎治 2015 「飛鳥地域の地域史研究(6) 檜隈大内陵の埋葬施設」『河上邦彦先生古稀記念献呈論文集』河上邦彦先生古稀記念会
- 下大迫幹洋 2002 「終末期古墳出土の土製棺台について」『ふたがみ12 香芝市二上山博物館年報・紀要』香芝市二上山博物館
- 崔 秉鉉 1987 「新羅の王陵の研究－新羅古墳の編年について－」『朝鮮学報』122 朝鮮学会
- 杉山信三・小笠原好彦片 1992 『高句麗の都城遺跡と古墳－日本都城制の源流を探る－』同朋舎出版
- 関 真一 2007 「初田1号墳と出土埴」『陶器千塚・陶器千塚・陶器南遺跡』大阪府教育委員会
- 高橋克壽他 2008 『特別史跡 キトラ古墳発掘調査報告』文化庁・奈良文化財研究所・橿原考古学研究所・明日香村教育委員会
- 伊達宗泰他 1972 『壁画古墳高松塚中間報告』
- 中井貞夫 1972 「初田1号墳 調査概要」『節・香・仙 第9号』大阪府教育委員会
- 奈良県立橿原考古学研究所編 1955 『日韓における7世紀の墓制』第1回橿原考古学研究所日韓古代シンポジウム資料

- 西口壽生 2004 「金銅製四環壺の鳳凰文」『季刊明日香風』89号 飛鳥保存財団
- 羽曳野市教育委員会 2007 『羽曳野市内遺跡調査報告書－平成16年度－』
- 羽曳野市教育委員会 2008 『羽曳野市内遺跡調査報告書－平成17年度－』
- 土生田純之 1998 『黄泉国の成立』 学生社
- 松村恵司 2006 『高松塚古墳の調査 国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策検討のための平成16年度発掘調査報告』 奈良文化財研究所・奈良県教育委員会・奈良県明日香村
- 森 浩一・東 潮・田中俊明 1988 『韓国の古代遺跡1 新羅篇(慶州)』 中央公論社
- 森 浩一・東 潮・田中俊明 1989 『韓国の古代遺跡2 百濟・伽耶篇』 中央公論社
- 森岡秀人 1983 「追葬と棺体配置－後半期横穴式石室の空間利用原理をめぐる二、三の考察－」『考古学論叢』 関西大学文学部考古学研究室
- 門田誠一 2011 『高句麗古墳と東アジア』 思文閣
- 山本 彰 2007 「河内御嶺山古墳と河内飛鳥寺－近つ飛鳥博物館周辺古墳6－」『大阪府立近つ飛鳥博物館館報11』 大阪府立近つ飛鳥博物館
- 吉井秀夫 1997 「百濟横穴式石室の埋葬方位」『立命館大学考古学論集I』 立命館大学考古学論集刊行会 立命館大学
- 吉井秀夫 1993 「百濟地域における横穴式石室分類の再検討－錦江下流域を中心として－」『考古学雑誌』 第79巻第2号 日本考古学会
- 吉井秀夫 2010 『古代朝鮮墳墓にみる国家形成』 京都大学出版会
- 読売テレビ放送 1988 『好太王碑と集安の壁画古墳－躍動する高句麗文化』